

第5講：“無縁社会”への処方箋—「たすけ合い」社会の再構築に向けて— 金子 昭 Akira Kaneko

いわゆる「3・11の衝撃」(東日本大震災・原発事故)以降、「がんばろう日本!」や「絆(きずな)は大切だ」という大合唱が続いている。けれども、その直前まで、日本社会では、「無縁社会」という言説が流行していた。この流行は、2010年1月のNHKスペシャルをきっかけに始まったものだが、その年の夏は「消えた高齢者」問題が取り沙汰されてもいた。そして年末から2011年初頭にかけては、児童養護施設にランドセルなどをひそかに寄贈する「伊達直人現象」が起こっていた。現在も「無縁社会」は終わっていないが、人々にあっては大きな「気づき」がなされているのが新たな状況である。

今回、私は、「“無縁社会”への処方箋」というテーマの下、この社会病理に対する1. 症状と診断、2. 治療の姿勢、3. 回復の指針、4. そのための処方箋という順番で、いわば医療行為になぞらえるような形にして論じてみた。

1. 症状と診断

現代日本において、急増してきたのは、おひとりさま/シングル(単身者)である。単身者の増加予想は、2005年では10人に1人(単身世帯は全世帯の29%)だが、2030年には6人に1人(同37%)に上ると予想されている。とくに単身世帯の増加が高い年齢層で注目されるのは、50~60代の男性である。その場合、60代は離別であるが、50代は、未婚単身者の場合が多くなるという。生涯未婚率も、2005年では男性16%、女性7%だが、2030年には男性29%、女性23%になると予想される。

単身世帯の3つのリスクは、藤森克彦によると、①貧困層の増大(貧困リスク)、②地域社会から孤立する人々の増加(社会的孤立リスク)、③介護需要の高まり(要介護リスク)がある。

表札も出さず、集合住宅の一室に住んでいる人々が増えてきた。彼らは、ともすると自らの中に閉じこもろうとする傾向がある。昨今では、なんらかの縁に頼りたいのだけど、そうした縁に恵まれず、人々とのつながりの輪からこぼれ落ちてしまったという形で、シングルになっている場合が少なくない。

ここで大切なポイントは、「せかいぢういちれつわみなきよたいや たにんとゆうわさらないぞや」(十三号43)と教えられている通り、無縁の人などだれもいないということである。これが診断の基本とならなければならない。無縁社会といっても、なんらかの理由で縁が断ち切れているだけである。

なお、共感できる他者(子どもたち・災害の被災者・犯罪の被害者など)だけでなく、「共感できない他者」(ホームレス・犯罪者など)への目配りも大切なところである。

2. 治療の姿勢

無縁社会とは、一人ひとりがいわば孤立し、ばらばらにされている社会である。要はそれをつなげることだ。人間関係があれば、人は孤独から救われる。そのつなぎの“縁”を宗教(天理教)がどう提供するか。問われているのはこれである。

宗教者もまた生活者であることには変わりがない。本教においても、そうした生活者としての視点を最大限に生かして関わることができる。共感的な「寄り添い支援」として、援助する者は孤立しがちな人の人生の「伴走者」として長く歩み続けることができるのである。

宗教者は、肩書きではなく、生き様である。人間はだれしも本質的には「シングル(=単独者[実存哲学の用語])」である。

宗教者には、そうした姿勢を示すことも大切である。「無縁社会」にあっては、飽和した有縁社会からの脱出の意味も見逃せないが、要は自ら「単独者」として新しい縁を結ぶ(結縁)ことである。このことに、本人にも援助する者にもその気概があるかどうか強く求められてくるだろう。

自分が真の意味で自分自身でなければならないという深い自覚に思い至ったとき、地位、名誉、財産、家族、健康など一切の外面的要素は背後に退いていく。そうした自分に向き合い、応答できるのは、神仏のような超越者のみである。これが可能なのは、まさしく宗教者なのではないか。宗教「縁」は、その意味で、血縁的な「拡大マイホーム主義」ではなく、自覚したシングル同士による結びつきとなるのである。

3. 回復の指針

宗教は、人間をまるごとたすけることであるが、それをあえて分けると、福祉が関わる形而下(日常生活)の「救援」と、宗教ならではの関わりが問われてくる形而上(精神生活)にかかわる「救済」がある。ただ、これはあくまで便宜上の分け方であって、実際には両者はダイナミックに連動しているのである。

本教においては、人間の助け合いが神の救済を引き出すという契機を中心に考えることが大切である。神人和楽の陽気ぐらし世界へ向かうための指針は、次の「おふできき」(十二号93、94)の中に端的に示されている。

このさきハせかいぢううハ一れつに
よろづたがいいたすけするなら
月日にもその心をばうけとりて
どんなたすけもするともゑよ

前半の「たすけ」は、人間による互いに「助け[扶け]」であり、後半の「たすけ」はそうした人々の助け心を受け取って、神ならではの救済がなされるという意味での「助け」である。真の救済は、人間相互の救援をふまえて神が行うものなのである。

これがまさに「たすけあい」の姿として、人間世界に現出する。それは、「人をたすける⇒たすかる人がいる⇒たすけ心が喚起される⇒人をたすける⇒…」という、拡大する循環となるものである。たすけられた者に、たすけ心を喚起することこそがたすけ精神である。

4. そのための処方箋

私が、今日の時代に対応した処方箋として提唱したいのは、本教によるNPO活動である。ここでのNPO活動は、「共助」(相互扶助に力点を置いた民間の福祉活動・事業の実践)として、広く理解してよい。現在、福祉の谷間を埋めていくような形で、さまざまなNPOが登場してきているが、これらは小回りもきき、一般の人々も参加しやすい。教友の中にも、そうしたNPOを立ち上げる人やグループが現われてきた。

天理教という名前では断られるところでも、NPOという名前ならば通ってしまう。それは社会の歯車と合致した組織だからである。本教において、余裕があるからNPOを行うのではなく、この活動こそ本教にとって起死回生の力になる。ここで求められるのは、自分を客観化した上で「おたすけ」に臨む姿勢である。下心をもたず、周囲の人々をひたすら思いやり、たすかってもらうよう、積極的に働きかけることから、「無縁社会」問題解決の糸口が切り開かれていくのである。